

小噺・落語入門サロン

■ 前座 (今日の話題・話のネタ)



落語歳時記シリーズ

師走(12月)の落語 「一目上り」

八五郎が、ご隠居の家の床の間の掛け軸に目を止め。これは狩野探幽の絵で雪折り笹、
『しなはるる だけは堪(こら)へよ 雪の竹』という句を付けた芭蕉の讃だと教えられ。
こういうものを見たときは「けっこうな讃です」とほめるよう教えられた。
次に大家さんのところに行く。「大家さん掛け物あるか。それをほめる」大家が見せたのが
『近江きんこうの 鷺は見がたく 遠樹(えんじゅ)の鳥からすは見やすし』
「これは結構なサン」とほめると、「これは根岸鵬斎(ねぎしほうさい)の詩(し)だと言わ
れて退散。今度はお医者先生のところへ。
「掛け軸を見せてくれ」と頼むと、先生が出したのが
『仏は法を売り、末世(まっせ)の僧は祖師を売る。なんじ五尺の身体を売って、一切衆生
(いっさいしゅじょう)の煩惱(ぼんのう)を安んず、柳は緑花は紅のいろいろか、池の面に
月は夜な夜な通えども、水も濁さず、影も宿らず』という長ったらしいもの。
「南無阿弥陀仏」「まぜっ返しちゃいけない」「こいつはけっこうな シ だ」
「いや、これは一休の悟り悟(ご)だ」「サイナラッ」と逃げ出す。
「ばかばかしい。ひとつずつ上がっていきやがる。三から四、五だから今度は六だな」
と検討をつけ、竹の家へ。なにか大きな船に大勢乗っている絵。「この上のは能書きか」
「能書きってやつがあるか。上から読んでも下から読んでも同じ・回文だ。」
『なかきよの とおのねむりの みなめさめ なみのりふねの おとのよきかな』
「わかった。こいつは六だな」
「ばかいえ。七福神の宝船だ」

■ 二つ目 (小咄の稽古)

映像や音声から学ぶ、小ばなしのコツ・つぼ
「プロに学ぶ小噺の話し方」落語の時間 “一分茶番(権助芝居)”
そのあと、皆さんの小ばなし披露とアドバイス

■ 大喜利

今回も 謎かけ で、お題は「冬至」「熊」

次回は2026年1月5日(月)

次回のなぞかけのお題は「馬(午)」「カレンダー(暦)」